

2024年12月1日（日）「もはや時がない」

ヨハネの黙示録 10:1-11

1 また私は、もう一人の力強い天使が雲を身にまとい、天から降って来るのを見た。頭には虹を戴き、顔は太陽のようで、足は火の柱のようであり、2 手には開かれた小さな巻物を持っていた。そして、右足で海を、左足で地を踏まえて、3 獅子がほえるような大声で叫んだ。天使が叫ぶと、七つの雷がそれぞれの声で語った。4 七つの雷が語ったとき、私はそれを書き留めようとした。すると、天から声がして、「七つの雷が語ったことは秘めておけ。それを書き留めてはならない」と言うのを聞いた。

5 すると、海と地の上に立っているのを、私が見たあの天使が、右手を天に上げ、6 世々限りなく生きている方、天とそこにあるもの、地とそこにあるもの、海とそこにあるものを造られた方にかけて誓った。「もはや時がない。7 第七の天使がラツパを吹き鳴らすとき、神の秘義が成就する。それは、神がご自分の僕である預言者たちに良い知らせとして告げられたとおりである。」

8 すると、天から聞こえたあの声が、再び私に語りかけて言った。「さあ行って、海と地の上に立っている天使の手にある、開かれた巻物を受け取りなさい。」9 そこで、天使のところへ行き、「その小さな巻物をください」と言った。すると、天使は私に言った。「それを取って食べなさい。それは、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い。」10 そこで私は、その小さな巻物を天使の手から受け取り、すべて食べた。それは、口には蜜のように甘かったが、食べると腹には苦かった。11 そして、私に語りかけるのを聞いた。「あなたは、もう一度、多くの民族、国民、言葉の違う民、また、王たちについて預言しなければならない。」

【序論】

今日の箇所は「教会の預言者的使命」について考えさせられるところです。預言者というのは、その漢字が示すように、神から預かったメッセージを神の民と世に語り伝える役割を担っています。それを伝えるとき、混ぜ物をしてはならず、神の意思をまっすぐ語らなくてはなりません。それは尊い役割であると同時に、重い責任を負っていてもいる。なぜなら、そのことばは誰にでも喜んで受け入れられるものではないことが最初から分かっているからです。旧約の預言者たちも、召命を受けるときに恐れを抱いている人が少なくありません。

主の言葉が私に臨んだ。「私はあなたを胎内に形づくる前から知っていた。母の胎より生まれ出る前にあなたを聖別していた。諸国民の預言者としたのだ。」そこで私は言った。「ああ、わが主なる神よ、私はまだ若く、どう語ればよいのか分かりません。」しかし、主は言われた。「『まだ若い』と言ってはならない。むしろ、私があなたを遣わす相手が誰であろうと赴いて、命じることをすべて語れ。彼らを恐れてはならない。この私があなたと共にいて、救い出すからだ」——主の仰せ。（エレミヤ 1:4-8）

預言者として召された人の多くが、できることならその責任を負わずにすむよう、神に訴えています。しかし、最終的には命じられた使命を立派に果たして天命を全うしました。現代

の教会にも、世に対して福音を語る責任があり、そのメッセージは「喜びの訪れ」であると同時に「耳の痛い話」でもあるのです。黙示録の預言を取り継ぐこともまた然りであります。

【本論】

この10章は、9章の終わりに出てきた「第六のラッパの幻」と次の「第七のラッパ」(11:15～)との間に挟まれた「幕間劇」としての性質を持っています。次回扱うことになる11:1-14は、もう一つの幕間劇です。

本論1. 隠されるべき秘義

また私は、もう一人の力強い天使が雲を身にまとい、天から降って来るのを見た。頭には虹を戴き、顔は太陽のようで、足は火の柱のようであり、手には開かれた小さな巻物を持っていた。そして、右足で海を、左足で地を踏まえて、獅子がほえるような大声で叫んだ。天使が叫ぶと、七つの雷がそれぞれの声で語った。(10:1-3)

黙示録には多くの場面で天使が登場しますが、ここに出てくる天使は「神の子」と見間違えるほどの力強い栄光を帯びています。この天使が「雲を身にまとっていた」とことと「足が火の柱のようであった」という二つの描写は、出エジプト記でイスラエルの民を導かれた神の栄光、「雲の柱」と「火の柱」を思い出させます。

主は彼らの先を歩まれ、昼も夜も歩めるよう、昼は雲の柱によって彼らを導き、夜は火の柱によって彼らを照らされた。(出13:21)

「頭の虹」は、ノアの洪水の後で神が人類と結ばれた契約を連想させます。

私は雲の中に私の虹を置いた。これが私と地との契約のしるしとなる。(創世9:13)

「顔は太陽のよう」は、主イエスが山上で姿が変わり光り輝いた様子と似ています。

六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。すると、彼らの目の前でイエスの姿が変わり、衣は真っ白に輝いた。それは、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほどだった。(マルコ9:2-3)

この天使は、黙示録1章に出てきた「人の子のような方」(1:12-16)と同質の天的栄光を帯びています。「右足で海を、左足で地を踏まえて」とは、この天使のとてつもない大きさを表していて、彼の語る事柄が地球全体に及ぶこと、全世界の運命に関わる事柄が伝えられようとしていることを表しています。「獅子がほえるような大声」とそれに呼応する「七つの雷」は、語られる事柄の恐ろしさ、それが審きのメッセージであることを示しているでしょう。

七つの雷が語ったとき、私はそれを書き留めようとした。すると、天から声がして、「七つの雷が語ったことは秘めておけ。それを書き留めてはならない」と言うのを聞いた。(10:4)

語られた事柄は、非常に重要であったため、ヨハネは書き留めようとしたのですが、記録は禁じられました。それは、そのメッセージがふさわしい時まで開示されてはならない内容だったからです。

本論 2. 終わりの時は迫る

すると、海と地の上に立っているのを、私が見たあの天使が、右手を天に上げ、世々限りなく生きています。天とそこにあるもの、地とそこにあるもの、海とそこにあるものを造られた方にかけて誓った。「もはや時がない。第七の天使がラッパを吹き鳴らすとき、神の秘義が成就する。それは、神がご自分の僕である預言者たちに良い知らせとして告げられたとおりである。」(10:5-7)

「手を上げる」ことは誓いを立てるときのジェスチャー。天使が語っている内容に注目しましょう。「もはや時がない」と。これは、悔い改めるために与えられた時間が少なくなってきたこと、神の忍耐が限界に達していることを意味します。「世の終わりが来ると言って、来ないではないか」と嘲笑う者への最後の警告です。人が悔い改めるために与えられている時間は、その人生の間のみなのです。遅くならないうちに神の呼びかけに応える必要があります。なぜなら、私たちは明日死ぬとも分からない存在だからです。あるいは、世の終わりが盗人のようにやって来るかもしれません。この感覚は、地震への備えと似ていると私はよく考えます。日本に住んでいますと、いつ大きな地震に見舞われるか分からない危機感を常に抱いているのではないのでしょうか。政府も繰り返し、いくつかの地域で発生しうる地震を予告しており、それがいつ起きてもおかしくはないと言われていました。しかし、漠然とした不安感を覚えながらも、実際に防災グッズを用意し家族で避難経路を話し合っている人はどれだけいるのでしょうか。その準備には労力が要するため、実際に行動に移すには重い腰を上げなくてはならない面があります。そして、明日やろう、明後日やろう……とずるずる先延ばしにしたまま準備ができずに生きている人は決して少なくないでしょう。人間は、まだ見ぬ未来に向けて備えるということが苦手な生き物なのです。

この真理は、霊的な問題にもピタリと当てはまります。罪の悔い改め、隣人との和解、永遠への備え、受洗の決断といった事柄と向き合うのを、人はとかく後回しにしがちです。いつかどうにかなるだろう、誰かがやってくれるだろう……、そのようにどこか人任せにしながら自分の人生における最も重要な課題に取り組まないまま放っておくことが多いのです。心に示されたなら、その日に取り組みたい。「その日」のうちでも、「後で」ではなく、「今」やらなくては、また「やらない」可能性が高まっていきます。

私の中でも、書き出してある人生の課題をクリアしたものとまだできていないものの両方があります。まだできていないものは、後回しにしてきたものにほかなりません。この礼拝を終えたら、もう一度しっかりと向き合うつもりです。このように、聖書のことばは読者に行動を促すのですが、その意味で、聞く人にとって「耳の痛い話」ともなれば、行動して問題を解決し肩の荷が軽くなる人もいます。後者にとっては福音となったということです。

天使は「第七の天使がラッパを吹き鳴らすとき、神の秘義が成就する」と言っています。ここで言う「秘義」とは、神が悪の勢力に対して勝利を勝ち取り永遠に治め給うことを意味します(11:15)。そこでは「神の国」が完成すると約束されている。その日は間近に迫っており、それに先立つ審きがあるとされている。

本論 3. 口には甘く、腹には苦い

すると、天から聞こえたあの声が、再び私に語りかけて言った。「さあ行って、海と地の上に立っている天使の手にある、開かれた巻物を受け取りなさい。そこで、天使ののところへ行き、「その小さな巻物をください」と言った。すると、天使は私に言った。「それを取って食べなさい。それは、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い。」そこで私は、その小さな巻物を天使の手から受け取り、すべて食べた。それは、口には蜜のように甘かったが、食べると腹には苦かった。そして、私に語りかけるのを聞いた。「あなたは、もう一度、多くの民族、国民、言葉の違う民、また、王たちについて預言しなければならない。」(10:8-11)

大きな天使が小さな巻物を持っているというのは印象的です。5章でも巻物が出てきましたが、それとは別物のようで、その具体的な内容は11:1-13において明らかにされる事柄のようです。そこには二人の預言者が出てきますが、その預言者が持つ不思議な力、彼らを殺す獣の登場、預言者の死と復活、地震と多くの人の死といった事柄が描かれていきます。

ヨハネが巻物を受け取って、命じられるままそれを食べると、「**口には蜜のように甘かったが、食べると腹には苦かった**」とあります。「巻物を食べる」という経験は預言者エゼキエルもしました(エゼキエル 2:9)。普通、巻物を食べるということはしないのですが、この象徴的な行為は、その書かれた内容を理解し完全に消化することを意味します。「口に甘い」とは、そこに展開されていく神と悪魔の戦いが、最終的に神の勝利で終わるという福音が約束されているからです。しかし、それに先立ち神の民の多くが迫害を受けることも語られており、その意味において「腹には苦い」のです。また、この「苦さ」は、神に立ち返らない者に対する審きという意味も含んでいるでしょう。

このように、預言者は良いことも悪いことも語らなくてはならず、それは幸いな務めであると同時に危険を伴う仕事でもあります。私自身も、黙示録の預言の意味を調べ理解することは、先の時代を読み解く特権を感じるとともに、これから展開していく世の中を知る怖さにも直面します。今後この国も監視管理社会体制が徹底されていくと思われませんが、そのような中で福音を語ることは迫害を伴う可能性が高い。国民全員に勝手に当てがわれたマイナンバーと預金口座の紐付け、新紙幣発行などは、国民が保有する資産を政府が把握するために行なわれています。また、中央銀行デジタル通貨の発行が2027年頃に予定されているようですが、お金がデジタル化されることの危険性は、国民のプライバシーがなくなること、私たちが何にお金を使っているかが筒抜けになり、信教の自由も脅かされること、簡単に資産の凍結ができてしまうことなど。共産主義社会が進んでいくと、それは無神論的世界観でありますから、信仰を持つことそのものが迫害の対象ともなり得るのです。そのような社会がジワジワと形成されてきている時代にあって、どのように福音を宣べ伝えていくべきであるか、私は日々問い続けています。

「あなたは、もう一度、多くの民族、国民、言葉の違う民、また、王たちについて預言しなければならない」と言われているように、神に立てられた預言者は如何なる世にあっても語らなくてはなりません。暗黒の世にあって、福音の光が失われてはならないからです。

【結論】

預言を語るということは、預言者だけに与えられる使命だと限定するべきではなく、教会とそれに属する人々にその使命が託されていると言うことができます。福音を信じ福音に生きる者は誰でも、福音を宣べ伝える使命を帯びているのです。それは特権であると同時に、ある人にとっては耳の痛い話となります。とりわけ、語っている自分自身が最もそのメッセージを受けているということになりますから、それだけ行動が求められる。悔い改めるべき罪があるならば、速やかに悔い改めましょう。解決すべき問題があるなら、先延ばしにしないようにしましょう。一つ行動に移すと、それだけ肩の荷は軽くなります。あらゆる縄目から解放されて、大胆に福音宣教の使命を全うしていきたいと思えます。

【祈り】

世の終わりに、尚も福音を語らせ給う、天の父なる神様。如何なる時代にあっても、主イエスの民は福音を取り次ぐ使命を帯びています。それを語ることは、時として恐れを伴いますが、それに打ち勝たせてくださり、聖書の真理をまっすぐ語る勇気をお与えください。そして、語ると同時に、私たち自身がそのことばを実行できるよう、お助けください。私たちが地上で負っている未解決の問題に光を当て、一つひとつ解決していくことができるよう、導いてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
各時代に預言者を見出し、宣教のことばを語らせ給う、父なる神の愛、
聞く者に決断を促す塩気あることばを心に蓄えさせ給う、主イエス・キリストの恵み、
語るに先立ち、自らが福音に生きる道を整えさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。